学校を創る

# 師弟同行による「協同的な学び」

八千代市立阿蘇中学校長　相馬（そうま）　剛（たけし）

## 1　はじめに

昭和22年５月に開校した本校は，昭和50年代後半には生徒数1,000名を超える大規模校に成長した。しかし，少子高齢化の影響で現在は生徒数198名の小規模校となった。

以前は，生徒指導困難校と呼ばれた時期もあったが，10年前より「学びの共同体」の理念を基に「協同的な学び」の実践に取り組み，現在では落ち着きのある学校に変貌した。

着任以来，「一人一人の学びを保障する授業づくり」に努めてきた。その根底にある，教育力の向上と生徒の可能性を伸ばすための「師弟同行」の精神を忘れてはならない。

## 2　教育力の向上

### ⑴授業デザイン

本校では，年間７回の校内授業研修を実施し，その都度授業デザイン（指導略案）を全教員が作成している。以前は教科ごとに授業内容を吟味・検討していた時期もあったが，教員数の減少でそれも叶わなくなった。

これでは，授業力の向上どころか衰退の一途なのは誰の目にも明らかである。そこで，授業デザインを作成後はまず校長の指導を受け，その後修正して研究主任に提出するように改めた。危機感で始めたデザイン指導だが，当初は私の専門教科（社会科）でさえ容易ではなく，他の教科については手探り状態であった。ただし，指導といってもヒアリング形式で，授業者と学習課題や展開について話し合うものである。そして話し合いの観点は，①授業は興味深いか，②生徒同士が学び合う場面はあるか，③何を学ばせるか，だけである。この機会に他の話題についても話ができ，また，先生方との関係づくりにも役立ち，まさに校長冥利に尽きる時間となっている。

### ⑵相互授業参観

一昨年の９月から始めた取組で，10日に１度は互いの授業を参観するよう奨励している。これは，互いの長所を学び合うことで，各自の授業改善を図るのが目的である。その際には，①１回あたり25分間以上参観する，②参観後は所定の用紙に感想やアドバイス等を記入して授業者に渡す，この２点を全職員と確認した。しかし，強制力のない取組だったので，最初の頃の実践者はごく数人しかいなかった。形骸化だけは避けたいと考え，今年度の９月に相互参観が一目でわかる一覧表を作成して，締め切り日までに授業参観が達成できるように工夫した。その結果，どんなに少ない先生でも２回以上は授業参観を行い，全12回中半分の６回以上参観された先生は17名中

９名にも達した。互いのアドバイスも好評で，着々と成果を上げている。

**⑶初若年研修**

経験５年以下の教職員を対象に実施している。それ以外の職員が講師役を担い，年間７回を予定している。講師には養護教諭や事務職員もおり，それぞれ「アレルギー対応」や「職員の服務について」の内容を教授した。

初若年教員にとって有意義な研修というだけでなく，講師役の中堅・ベテラン教員のモラールアップにもつながっている。しかも，校長や教頭をはじめ毎回ほぼ全員が参加していることも，同僚性の構築に一役買っている。

## ３　生徒の可能性を伸ばす

**⑴黙動気づき清掃**

「黙想！」清掃リーダーの号令で，全校生徒・職員が１分間の黙想を行う。校内全体が静寂に包まれる。挨拶の後清掃が始まるが，この間は一切会話も笑い声もなく，各人が一心不乱に清掃する。清掃後も１分間の黙想を実施して，自らの活動を振り返る。

わずか10分間の活動だが，単なる校内美化活動ではない。そこには，自らの思考・判断に基づく表現活動があり，生徒個々の可能性を引き出す活躍の場にもなっている。

１分間の黙想シーン

**⑵70周年記念集会**

今年度，創立70周年の節目の年を迎え，昨年10月に記念集会を開催した。一般的に記念式典では，来賓の話が多くなり生徒は主役になりにくい。そこで記念集会と銘打ち，生徒会執行部に会全体の運営を任せ，ＰＴＡに後援を依頼した。「学びの共同体」を導入した元校長先生が30分間の講話を行い，それ以外の時間の多くを生徒の活動に使った。阿蘇中歴史クイズ，現在活躍する阿蘇中生の紹介，自分の将来像を語る等，生徒会の企画や生徒の日常生活を再現したものばかりである。この日ＰＴＡから贈られた記念タオルも，美術部がデザインしたものである。生徒の手による記念集会は，師弟同行をモットーとする教職員の愛情に支えられ大成功を収めた。

**⑶総合体育祭**

八千代市では毎年秋に，市内の全中学２年生が一堂に会して，各校ごとに学校演技を披露している。本校は，代々７段ピラミッドづくりに取り組んできた。しかし昨今の組み体操による事故の影響から７段ピラミッドに別れを告げ，今年度は新しい学校演技づくりに挑戦した。１つは，日本体育大学の集団行動をモチーフにしたオリジナルの『集団行動』，もう１つは，日本古来の剣道演武『日本剣道形』である。集団行動の軽快かつ緻密な動きと，絶妙な足さばきによる緊張感溢れる剣の舞は，多くの観客を魅了した。この瞬間，夏休みを返上して演技づくりに悪戦苦闘した生徒たちは報われた。そして，演技指導に日々奮闘した先生方の笑顔が忘れられない。

## ４　おわりに

ちょっと物騒な言い方になるが，生徒を生かすも殺すも教師次第である。常に生徒に寄り添い，生徒の全てを受け入れる教師集団には，ただ頭が下がるのみである。そんな私に何ができるか，まだ道半ばである。

学校を支える

# 定時制高等学校の現状と課題

## ～先生方と共に～

県立木更津東高等学校　定時制の課程教頭　池谷（いけや）　道雄（みちお）

### 1　はじめに

教頭として２年目を迎えた。全日制に30年勤務したが，定時制は初めての勤務であり，全日制とは全く異なることが多い。私が学校を支えているのではなく，私が先生方に日々支えられている気がする。定時制の現状及び私が企業研修で学んだことについて述べさせていただきたい。

### 2　本校について

本校定時制は，昭和24年４月，昼間定時制として家庭科一学級で新設されたのが始まりである。翌25年４月，夜間定時制として，普通科二学級・商業科一学級を設置し，本校の原型が出来上がり，平成19年度募集から，普通科一学級・商業科一学級に学級減になり，現在に至っている。

職員は，養護教諭を含めて19名である。30代が１名，40代が２名，50代が９名，60代が７名という構成になっている。現状は，若手教員が少なく，ベテラン教員が多数を占めている。

### 3　生徒の現状

クラス数は現在各年次とも，普通科１クラス，商業科１クラスの編成である。その他５年次があり（４年間で卒業が認められなかった生徒），全学年合計で９クラスとなっている。

入学する生徒は，ほとんどが中学校卒業と同時に入学している。生徒の年齢の幅は広く，60歳を超える生徒もいるが，近年は，ほとんどが中学卒業後の入学である。

生徒の年齢層は，全日制の生徒とあまり変わらないが，学習歴や生活環境の異なる様々な経歴を持つ生徒が多数入学している。入学動機，目的意識，学力等の個人差も拡大している。家庭環境が複雑な生徒も多く，様々な面で家庭の協力が得にくい状況も生じている。そのため，生徒数が87名と少ないとはいえ，一人一人の生徒の抱える問題を考えると，19名の教諭で指導にあたるのは困難なケースもある。そのような状況の中でも，生徒の中には新しい環境のもとで学び直し，再出発を心に決めて頑張っている生徒も多数いる。しかし，残念ながら毎年新入生の約30％の生徒が，一年以内に何らかの理由で本校を去って行く。

### 4　求められる方向性

以下の４点が，定時制教育の原点であると思われる。

- 生徒本人の困っている内容を理解し，特別な事情を抱える生徒に対して，各自の能力や実態に応じ，一人一人を大切にする教育。
- 「基礎･基本の学力の育成」と「生きる力」の育成。
- 多種多様な生徒に対して，教育力を発揮できる柔軟性を持つ学校。
- やり直しのきく学校。

これらの実現のためには，多様な単位認定の拡大が必要であると思われる。具体的に現在本校では，毎年若干名ではあるが，

高等学校卒業程度認定試験の単位認定，知識・技能審査による単位認定，定通併修による単位認定を行っている。

その他にも，学校間連携（他の高等学校における学習成果の単位認定），大学･高専･専修学校における学習の単位認定，ボランティア活動やインターンシップ等の単位認定，実務代替による単位認定（職業に関係する教科・科目を履修する生徒が，それに密接する職業に従事し，それを履修したと同じ効果がある場合に単位認定する。）等を考えていく必要があるだろう。

## 5　教頭として

私は，平成22年度に一年間企業等派遣研修で百貨店に行かせていただいた。その時に学んだことが，教頭としての基盤になっていると思っている。

百貨店の販売員の仕事は，「お客様に満足していただくこと」である。感じの良い応対が欠かせず，身だしなみに気を配り，笑顔・挨拶・タイミングの良い声掛けが，とても大切になってくる。また，働く職場の環境に気を配り，清潔で整理整頓が行き届いてる状態を保ち続けることが大切になってくる。そして，何よりも大切なのが，豊富な商品知識である。流行や地域の情報に敏感になり，今欲しい商品をどれだけ品揃えできるか，その商品を引き立てるような演出や提案をすることができるかである。私は，これらのことが全て教育現場でも当てはまると考えている。生徒や保護者，地域住民に笑顔で挨拶や声掛けをしているか。地域社会に開かれつつある学校において，職員の話し方や対応の仕方で，保護者や地域住民からの信頼を失うことをしていないか。プロ意識を持ち，一人一人の生徒を大切にし，真心のこもった授業，生徒に寄り添った教育，生徒の進路実現に努力しているか。「特色ある学校づくり」や「生徒募集」において，自校の特色や独自性を見出す努力をしているか等。生徒や保護者，地域住民の行動やニーズをしっかり見られる目，話をしっかり聞ける耳，感謝・感動できる心を持ち続け，何をすればよいのかを常に考え行動を取らなければいけない。そのためには，目・耳・心を常に磨き続ける必要があるのではないか。販売員の目・耳・心が常に緊張していなければいけないのと同様に，我々教師も同様の姿勢を持ち続けなければいけないと感じる。百貨店においては，「全ての主語はお客様」であり，自分のミスで企業のブランドイメージを傷つけたり，収益を悪化させたりしてはいけないというプロ意識を持ち，販売員は日々努力を重ねている。学校現場では，「全ての主語は生徒」と置き換えることはできないかもしれないが，我々教師がプロ意識を持ち，常に生徒の立場になって考えるという基本姿勢を貫くことが，学校教育目標・重点目標の実現につながるのではないかと考える。

## 6　最後に

定時制の課程の場合，夜間は副校長・教頭が判断をしなければいけない場面が多い。様々な困難なこと，臨機応変に対応しなければいけない場面が多々あった。特に生徒指導に関しては，先生方に不安を与えないようにしなければいけない。冷静に判断をし，決してぶれることのないように瞬時に対応ができなければいけない。私は具体的に「学校を支える」ことは行えていないかもしれない。しかし，教員数の少ない中で，あらゆる場面で先生方に支えられ，私も先生方を支えることができているのではないかと思う。

学校を動かす

# ふだんを大切にできる教務主任であること

野田市立木間ケ瀬中学校教諭　荒井（あらい）　明（あきら）

## 1　はじめに

私は，これまで学年主任や進路指導主事という立場で校務に関わってきた。初めて学年主任を務めた頃は，学年をうまく動かそうという意識ばかりが先走り，全体を見る余裕はなかったという思いがある。

しかし，教務主任となったときに学校運営の観点から視点を更に広げ，教育を見つめるよう助言をいただき，大切なことを学んだ。

その中で心掛けたことを紹介したい。

## 2　先取りとゆとり

どんな活動にも目的がある。教務主任となれば，かなり先まで見通しをもたなければならない。行事予定や日々の日程調整等，どれだけ先を見通せるかという視野の広さを持つことが重要である。

しかしながら，それぞれの分掌において職務がきちんと遂行されなければ本末転倒になってしまう。そこで心掛けたことは「計画・周知は早く」ということである。行事計画や提出文書，提案資料の作成等，特に業務が煩雑になるときは日報等を利用し，何度も先生方へ周知することを心掛けた。早めに物事が進めばアイディアも出しやすいし，何度も見直す余裕ができる。業務改善の一助にもなる。

また，各学年の活動を互いに理解し合い，同じベクトルに向いた時に学校が活力ある動きをしていると実感する。その橋渡しをすることも大きな役目の一つである。校長先生，教頭先生の助言をいただきながら，できる限り各学年の意向を聞き，調整し，カリキュラムを作っていく。多くの先生方とのやり取りを大切にすることで，子どもにとってプラスになる活動の基盤を整えるよう心掛けた。

## 3　教科担任であることを忘れない

教務主任であっても子どもから見れば一人の教科担任である。このことは忘れてはならないし，学級担任を持たない立場においては大切な子どもとのふれあいの場である。授業時には毎時間必ず全生徒への声掛けをし，毎週行っている小テストの際にも一人一人との会話を心掛けた。子どもとの距離が近ければ，子どもにとって何が必要かというヒントも発見できる。このような時間を大切にした。

## 4　笑顔で誠実に

職員室でもできる限り笑顔を心掛けた。そうすると自然と活力がわき，心にゆとりを持つことができ，先生方とのつながりも自然なものになってくる。校長先生，教頭先生も情熱の中に楽しさを持ち合わせており，たいへん元気付けられた。

## 5　おわりに

教務主任は学校を動かす上でたいへん重要な職務であるが，改めて思うことは日常を大切にすることである。子どもにとって一日たりとも無駄な学校生活があってはならない。だからこそ，落ち着いて授業や行事ができる環境を整えるための縁の下の力持ちでありたい。

また，前任校においても現在においても校長先生，教頭先生の御指導があって今の自分があると思っている。この感謝の気持ちを忘れず，これからも努力していきたい。

研修を生かす

# 恐れと感謝をもって

県立つくし特別支援学校教諭　野村（のむら）　功美（くみ）

## 1　はじめに

昨年度，長期研修生として教育臨床の分野で研修に出させていただいた。様々な困難を抱える子どもや保護者の方々と接することの多い特別支援学校に勤務し，教育相談を学ぶことで子どもと保護者を支えたいと考えた。

## 2　教育臨床で学ぶこと

教育臨床での研修は，千葉大学での講義・演習と，県子どもと親のサポートセンターでの実習が両輪である。大学では御指導いただいた先生方の専門性を通し学校・教師の役割については再考する機会を，子どもと親のサポートセンターの実習では教育相談の難しさと正面から向き合う機会を頂いた。どちらの場でも教育相談の手法ではなく，これまでの自分を振り返り，向き合うことが大きな課題であった。

## 3　日々の実践の中で

### ⑴担任として

今年度，高等部一年生を担任させて頂いている。本校高等部には，中学部からの内部進学生，地域の中学校からの外部進学生がおり，生活面での課題を多くもつ生徒から一般就労を目指す生徒まで，様々な発達段階の生徒が在籍する。発達に応じた支援は前提であるが，間もなく社会人となる生徒とその保護者への支援は，発達段階のみならず家庭や地域の状況，就労への考え方によっても大きく異なる。また，進路以前に，学校生活・集団生活への適応に課題をもつ生徒もいる。生徒一人一人の状況をどのように読み取り，意味付けるか。情報をどのように収集し，関係機関等の資源を活用していくか。研修で得た，問題状況の理解・支援のための視点を実践の中で活用し，振り返り，更に深められるよう取り組んでいる。

### ⑵チームの一員として

特別支援学校では，チームティーチングが基本的な形態である。学校の職員数も多く，教師間での生徒の実態の読み取り，指導・支援の方針，価値観の共有が生徒と関わる上で重要となる。より良い支援には教師同士の意思疎通が欠かせないが，実際には難しいこともある。なぜそう考えるのか，相手の背景を考え，人として尊重し合いながら関わり続けることで生徒と学級を育て，より良い授業へとつなげる。教師集団の大きさは，特別支援学校に特有の長所である。それぞれの教師のもつ良さを生徒・保護者へ，教師同士の連携へと生かせるような働きかけを行い，自分自身もまた教育資源の一つとして役立てることを模索し，実践する日々である。

## 4　研修を振り返って

研修中，持ち寄った事例の検討会を行った。子どもや保護者の行動の意味は教育臨床生一人一人によって読み取りが大きく異なり，意味の多様性・多層性に気付かされた。他者との関わりや支援に唯一の正解はなく，教師一人ができることの限界と自分自身の不十分さを自覚する契機となった。援助する側だと思っていたが，助けられ与えられているものの大きさと，足りない自分を認める大事さに気付かされた一年間であった。現場に戻り，担任として他者と関わることの重さや恐れとともに，大きな感謝を感じている。学ぶ機会を与えて下さった在籍校の先生方，御指導頂いた先生方に，改めて深く感謝申し上げる。

授業を創る

# 学び合い助け合いで意欲を引き出そう

県立泉高等学校教諭　齋藤（さいとう）　航（わたる）

## 1　はじめに

自分自身のこれまでの学習指導を振り返ってみると，ごく一般的な講義形式が多く，取組がおもわしくないことがあった。机間指導をしてみると，違う教材を開いていたり，全く違うページを開いていたりすることもあった。授業中に何もしていなかった生徒と話してみると「指示されても何をしていいのか分からないのでできなかった」という。

そこで授業にグループでの活動を取り入れ，わからないことを確認したりグループ内で話し合ったり助け合ったりすることを勧めた。

### ⑴グループの編成

グループの構成は男女２名ずつの４名を基本とする。グループ編成は５名でも試してみたが，座席の配置が一つだけ離れるようになり距離ができることや「自分が参加しなくてもいいかな」と思う生徒がいたりしてうまくいかなかったグループが出てしまった。

グループを編成するにあたり，「わからないことがあったときに頼れる人は誰ですか」というアンケートをとった。男女混合にする関係で男子も女子も挙げてもらった。名前の挙がった生徒がグループのリーダーをしてくれることを期待して，これらの生徒を中心に４名を基本とするグループ案を作成した。このような活動が苦手な生徒も少なくないことから，グループ案を学級担任に確認してもらうとよい。

### ⑵グループでの約束事

授業では生徒がわからないことを「わからない」と，他者に依存できる関係づくりが必要であり，約束事として以下のことをできるようにさせたい。『中学校における対話と協同』」佐藤雅彰（著）佐藤学（解説）を参考にした。

ア　人の話を互いに聴き合う。
イ　他者の意見や考えに敬意を払う。
ウ　自分の考えの根拠や理由をもつ。
エ　根拠や理由を基に自分の言葉で表現する。
オ　他者の意見に対して反応する。

## 2　実践例

生徒にアンケートをとると泉高校の校名の由来を知っているものは４クラス中２人しかいなかった。身近なことでも知らないことや気付かないことが多いので，生徒が通っている学校周辺のことを調べてみることにした。「泉高校の周辺はどのような特徴をもつ地域だろうか」という質問をし，イメージを書き出してもらった。生徒には付箋を配り１枚に１つの事柄を書くようにした。できるだけ多くのイメージを書いてもらうため，１人10枚くらいは書いて欲しいと指示した。

また，このときはできるだけ自分で考えて周りの人とは相談しないで書いてみようということにした。自分の考えが「間違っているかもしれないから書けない」という生徒が出ても，気にしないで思ったことをどんどん書いてもらった。

時間を見てグループの中で自分の書いた

内容を発表し，似た内容のものはひとまとめにして，模造紙に貼りその内容に合う見出しをつける。

「生き物」,「自然」,「交通手段」,「施設・人」,「農業」,「不便」，などの見出しをつけることができた。主な見出しと内容（イメージ）は次の通りであった。

| 見出し | 内容 |
|---|---|
| 生き物 | カラス・虫が多い・ネズミ・ネコ |
| 自然 | 自然が豊か・緑が多い・坂が多い |
| 交通手段 | 交通手段が少ない・バイクがよく来る |
| 施設・人 | 老人ホーム・高齢化・不審者が出る |
| 農業 | 畑が多い・農家が多い |
| 不便 | スーパーやコンビニが少ない・街灯が少ない |

**図１ 主な見出しと内容（イメージ）**

この見出しから調べる項目をつくらせる。例えば「農業」についてであれば「この地域ではどんな農作物を作っているかを調べる」のように最後に～を調べるという形にした。全ての見出しに対して項目をつくるのが困難であれば，いくつかを選んでも構わない。例えば次のような項目ができた。

自然→森林の面積を調べる。
農業→栽培農作物を調べる
不便→お店の場所（分布）を調べる。
不便→街灯について調べる。

グループで調べる項目を決め，できるだけ重ならないように調整した。それぞれインターネットなどを利用して調べ，表やグラフにまとめる作業を行った。

**作業例「お店の場所を調べる。」**

スマートフォンのマップ検索を使い，検索結果を地域の地図（1/10000）に書き込んでいった。（地図は教員側で用意した。）生徒は検索したお店が地図上のどの位置にあるかを判断する事が難しいため，こちらで確認をしながら作業を行った。国土地理院の地理院地図を利用し，学校（中央の●）から半径１kmと２kmの円を描きコンビニやスーパーの位置に▲の印をつけた。**図２**を見ると学校から１番近いコンビニまで直線距離で約1.1kmであり，半径１km以内には全くないことがわかり，生徒のイメージを裏付けた。

**図２ 学校周辺のコンビニやスーパー**

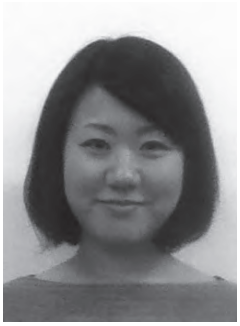
## ３　まとめ

グループの授業をやってみて，「わからないときに周りの人に聞きやすかった」,「周りの人が助けてくれるので，授業がわかりやすかった」,「眠くなっても我慢できた」などの感想があがった。一方で「グループで授業をやるとうるさくなってしまい，先生の話が聞き取りにくい」という意見もあったが，全体としては意欲を引き出すことができた。グループ学習を取り入れ，学び合いや助け合いをすることで主体的に授業に取り組むことに効果があったと考える。また，人と関わることの大切さやその難しさを生徒に伝えることができるだろう。

＜引用・主な参考文献等＞
◆佐藤雅彰（著）佐藤学（解説）『中学校における対話と協同』ぎょうせい
◆杉江修治『協同学習入門』ナカニシヤ出版
◆国土地理院　地理院地図 https://maps.gsi.go.jp/

子どもを知る

# ともに生きる



市川市立第五中学校教諭　那覇（なは）　舞（まい）

「生徒とともに成長をしたい」―そう思い，教師を目指すようになりました。きっかけは教育実習。将来について悩んでいた時，自分が学生だった頃には見えなかった世界が見えるようになりました。一時間の授業のために，どれだけの準備をしているかということ。そして，教材研究がつきることはないこと。環境を整えること。生徒を指導するにも一人ではなく，組織的に取り組むこと。そして何よりも実感したことは，先生方が子どもたち一人一人を大事にしているということでした。昨日笑っていた生徒が，今日は泣いている。昨日できなかったことが，今日できるようになっている。このような生徒の成長や日々の小さな感動を，生徒と共有できる教師という職業は，たいへん魅力的なものになりました。

現在，採用されて二年目を終えようとしています。うまくいかない事，辛い事もたくさんありますが，一歩一歩成長していく生徒の姿と，温かい先生方や保護者の方々に支えられています。毎日が同じように過ぎることはなく，日々新しいことだらけではありますが，一瞬の感動のために頑張れるのだと思います。ある先生に「子どもはみんなの宝，日本の未来」と聞いたことがあります。先生方や保護者の方々，地域の方々と連携し，子どもたちが希望を持って社会にはばたいていけるよう，今後も精一杯頑張っていきたいと思います。

子どもを知る

# 言葉の力

## ～自己開示の大切さ～

県立国分高等学校教諭　佐々（ささ）　詩織（しおり）

教員のくせに人見知りの私は，教壇に立ったばかりの頃，生徒と話すことが全然できなかった。それでも何とかコミュニケーションを取ろうと，生徒に「授業のペース速いかな。」などと話しかけてみたが，返ってくるのは「別に･･･」という素っ気ない返事のみ。夏休みが終わっても，状況は大して変わらなかった。教員一年目だからといってなめられまいと厳しく接していたのが裏目に出たのか，生徒からの反発もあった。やる気を失いかけていた私にベテランの先生は，「はるかな高みから物を言っても，生徒には届かないよ。自分が生徒の方に降りていかないと。」と微笑んだ。

冬休みが近づいた頃，勇気を振り絞って，授業中に，高校時代に自分が失恋した話を生徒にしてみた。自分の話を生徒にするのは初めてだった。生徒の聞く態度がそれまでとは一変した。休み時間，以前話しかけた生徒が私のところにやって来て，「先生の授業は少し速いけど，分かりやすいです。」と言ってくれた。とても嬉しかった。

それから少しずつ生徒と話せるようになって，生徒に心を開いてもらうにはまず自分が生徒に心を開かないといけないのだなとしみじみ思うようになった。話してみると，生徒の知らなかった面がたくさん見えてくる。一方的に物を言っていた自分が恥ずかしかった。

これからも生徒の心に響く言葉を紡げる教員になれるよう，努力していきたい。